

マルクス「本源的蓄積」論の再検討-「小農理論」の視座-

隅田聡一郎（社会学研究科博士後期課程）

本報告では、マルクスの『資本論』第一部第 24 章「本源的蓄積(以下、源蓄)」における、小経営的生産様式および小農カテゴリーの位置づけを検討した。マルクスの「源蓄」論は、『経済学批判』序言の「史的唯物論の公式」に見られるように、「封建的生産様式から資本主義的生産様式への移行」という主題をめぐって、歴史学者を中心に論争の対象となってきた。また、先行研究においては、とりわけ第 32 章「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の「個人的所有の再建」論が長らく論争の対象となってきたが、草稿や第二版とフランス語版の比較検討からテキストを解釈すれば明らかなように、「源蓄」論全体において貫かれている「小農理論」の視座を看過することはできない。こうした問題意識から、少々専門的で拙い報告をさせていただいたが、当日は、会場から多くのご質問とご指摘をいただくことができた。

まず、大河内先生からは、小農カテゴリーと小経営的生産様式との違いについてご質問をいただいたが、後者は、本報告の主題である小農以外にも、独立手工業者やギルドなどが含まれると回答させていただいた。また、報告者が、「源蓄」論の主題は、封建的生産様式からではなく、小経営的生産様式から資本主義的生産様式への移行であることを強調した点に対して、むしろ小経営的生産様式からの移行が、封建的生産様式からの移行を補足するものではないかというご指摘をいただいた。この点に関しては、報告者が、マルクスの封建制度や農奴制の概念について精緻な検討を行っていないため、不十分にしか回答することができなかった。今後の課題とさせていただきたい。

また、「小農」カテゴリーには、「独立自営農民（ヨーマン）」や、マルクスが定式化したところの「小農民」が含まれるのかというご質問をいただいた。これに対して、前者は、人格的独立性をもつ点で典型的な小農とは異なるが、「小農」に含まれ、後者は、資本主義的生産様式のもとで新たに創出された農民階級であり、「小農」には含まれないと回答させていただいた。一般的には、宇野経済学のように、後者が「小農理論」とされるが、マルクスが強調するように、本来の小農カテゴリーすなわち小経営的生産様式は、資本主義的生産様式のもとで固有の論理をもって存続し続けるのではなく、14 世紀から 18 世紀にかけてのイングランド史において見られるように、資本主義的生産様式に反して「長々と続いた」のである。すなわち、小経営的生産様式は、徹底徹底、資本主義的生産様式と両立せず、歴史的にも、現代的にも、資本主義的生産様式への移行を妨げるものにほかならない。これが、資本主義批判としての小経営的生産様式および小農カテゴリーの核心的意義であった。

さらに、平子先生からは、『ザスーリチへの手紙』や『フランスの内乱』第一草稿に見られるように、晩期マルクスが、労働運動のみならず、「小農」という農民問題にますます着目していった点を補足していただいた。グローバル化のなかで、国内の TPP やアフリカなどへの開発援助競争に見られるように、小農や農村の自給自足的生産が解体されつつあるが、現代的にも、マルクスの「源蓄」論を再考することによって、資本主義批判としての小農理論を展開することがもとめられているのではないだろうか。